

## 英論文のすすめ

浜 田 節 男

英語で学術論文を書くとなると、プレッシャーを感ずるのは私だけではないだろう。複雑な感情表現を必要としない科学論文であっても、なかなか難しい。頭の中で、日本語で思考されたものを英語に置き換える作業が問題なのである。

農耕民族の「集団を基本」とする文化に張り付いている日本語と狩猟民族の「個を基本」とする文化に張り付いている英語との間には、大きなへだたりがある。集団として農耕生活を営んできた日本人には「私」も「あなた」もいない。必要なのは全体の調和である。男女二人がいて、「好きです」とどちらかが言えばたちどころに愛の告白だと理解できる。しかし、英語であれば、たとえ男女二人が見つめ合っていたとしても「I love you」と主語も述語も必要なのである。「I」と「YOU」が厳然として存在しているダイアログ言語である英語が一義的、論理的であり理論の構築が直線的であるのに対し、「私」も「あなた」も区別しないモノローグ言語である日本語は感覚的、情動的であり、理論の構築の仕方は絵画的である。自分も相手も意識しながら対話をしていく英語と比較すると、日本語はまことに独特の言語なのである。また、日本語には、感情表現を微妙に表現する形容詞や副詞がたくさんある。科学論文には感情表現はいらぬとは言いが、頭の中はモノローグ的に働いているのでなんとも厄介なのである。しかも、長い間英語を学んでも、ものにできないという劣等感が我々を蝕んでいる。二千年あまりをかけて培われてきた西洋文化を、日本はたった百数十年の間に駆け足で吸収してきた。日本独自の豊かな文化すら忘れてひたすら西洋化の道を走ってきた。西洋への憧れがあまりに強すぎた結果ではあるが、日本も独自のすばらしい文化を築いてきたことを誇りに思うべきであり、そうすることで対等に英語に立ち向かえるのだ。

さて、中高年は熟語や喩えを誤って使っているという統計がでたのはご存知であろう。さまざまな国の文化や言語の影響を受けながら、そして、その時代に生きる人々に使われながら日本語は変化し続けている。昨今の学生には一般教養が欠けていると言われ、若者の文字離れが進む風潮の中で、つい先ごろ「文字・活字文化振興法」が国会で成立した。国民の活字離れや読み書き能力の低下に歯止めをかけるために、国や地方自治体が教育の振興や学術出版物の普及を促進すべきであるという理念の基に、あらためて読む力と書く力を基本とする「言語力」養成を求めている。地方自治体や国に求める施策としては、図書館の無い市町村には設置を求め、すでに図書館のある市町村には資料の

充実や司書の増員などを促すこと、大学の教員養成課程に「読書科」などを設けること、そして著作者や出版者の権利充実などが盛り込まれている。普及が難しい学術出版物については国が支援するという。昨年健康増進法や今年のクールビズのように良い結果をもたらすことを願うものだが、施行されれば、その効果がすぐ上がるわけではなく、これにも社会全体の努力が必要である。疎かにされてきた教養課程の必要性が再認識された感があるが、指導する立場からすれば、学ぶ素養を培う基盤をきちんと身につけることが、専門課程に進んでからの大切な要素となることは言うまでも無い。

研究過程の記録や成果のレポートを書くとき、他の論文を読んで論旨をまとめるときなど、あらゆる場面で国語力・言語力が必要となる。もちろん、日本語は多義的で感覚的であるので、論理的で明確な固定的概念に構成するという作業が求められる。

母国語の良さを再認識しながら、国内の論文のみならず、怯むことなく英語の論文をできるだけたくさん読むことは、論理的思考に慣れ、明快かつ理論的な文章を書くことができる一助となる。

(奥羽大学歯学部口腔病態解析制御学講座歯科薬理学分野教授)